

宝くじ おもしろ話

宝くじ券裏の「住所・氏名欄」誕生の秘話と60年の歩みを探る ~前編~

現在の宝くじ券の大きさは縦7cm×横15cmだが、宝くじを買ったら表面の「番号」ばかりでなく、裏面を一度はじっくりと見てもらいたい。裏面には狭いスペースながら発売上の約束や注意事項がぎっしり印刷されている。その最も目立つ場所に存在しているのが、この宝くじ券の購入者（所有者）の住所・氏名の記入欄で、今回のテーマは、この「記入欄」だ。

すべての宝くじ券の裏面に、この「記入欄」が登場したのは1960年4月からだが、その誕生の秘話を紹介しよう。1959年8月に神奈川県に住むA子さんが東京・新宿で第226回東京都宝くじを1枚拾って届け出たら、それが1等200万円の当せん券だった。しかし、

当時の「当せん金付証票法」では、万一、当せん券の落とし主が現れなかった場合でも、当せん券の拾い主に当せん金を支払うことができなかった。

このため、1960年5月に同法を改正して「拾った人でも、落とし主が現れなかった場合には当せん券の購入者とみなす」（同法第11条の2）と改正した。正直者のA子さんには、その後、当せん金が支払われた。

この出来事を教訓にして、1960年4月から発売のすべての種類の宝くじ券の裏面に住所・氏名の記入欄が印刷された。そして、まさかの時に備えて、購入者（所有者）が住所・氏名等を記入できるようにした。

「記入欄」ができてから来春で60年。その後、この記入欄は紛失・盗難などといったケース以外でも、重要場面で有効利用されている。代表的な用途として①高額当せん者は必ず記入、②「宝くじの日」記念のプレゼント企画当せん者は必ず記入……などがある。（つづく）



ご当地クーちゃん
光源氏クーちゃん

宝くじ おもしろ話

宝くじ券裏の「住所・氏名欄」誕生の秘話と60年の歩みを探る ~後編~

宝くじ券の「住所・氏名欄」の後編だ。宝くじ券の裏面に購入者（所有者）の住所・氏名欄が最初に印刷されたのは1960年度から。それから2020年で60年になるが、当欄の項目・形態・印刷位置などに、幾多の変遷を経て今日に至っている。

- (1) 1960年4月の新年度から発売のすべての宝くじの裏面の右端にタテ位置・2列で「住所・氏名欄」が初めて印刷された。
- (2) 1980年1月に発売の第155回全国自治宝くじは2枚1つづりのシートくじだった。このときから住所・氏名欄が横書きとなり、印刷位置も券面右下に移動。さらに電話番号の記入欄が追加された。

- (3) 1982年3月に発売の第177回全国自治宝くじからは、住所・氏名欄の位置が再度、移動。今度は宝くじ券の右上に印刷された。そして、このときから、氏名欄に「押印欄」が新たに設けられた。

- (4) 氏名欄や住所欄を囲む「線」があるが、この「ライン」に隠し文字が採用されたのは2000年2月に発売の第404回全国自治宝くじ（グリーンジャンボ宝くじ）からだ。隠し文字はマイクロ文字のローマ字で「TAKARAKUJI」の10文字が細かく並んで印刷されている。お手元の拡大鏡で、ご覧あれ。

- (5) 2016年1月に発売の第690回全国自治宝くじから、住所・氏名欄にあった「電話番号欄」が削除された。代わりに「住所欄」が広がった。そして、記載順序が従来と異なり、①都道府県欄、②氏名欄、③住所欄の順となり、今日に至っている。小さなコラムだが、時代とともに変化している。



ご当地クーちゃん
メジロクーちゃんどめじろん

当せん者エピソード

宝くじ こぼれ話

同じジャンボで父が1億円&子が3億円 ビックリ!父子で4億円当せんの大快挙

「こんなことって、世の中にあるの?」といえるほど奇跡的な「強運の父と子」がいる。話題の主は富山県に住む父親の無職Kさん(69)と長男の会社員Sさん(35)だ。Kさんは40年来の宝くじファンで、昨年のハローウィンジャンボ宝くじ(市町村振興・第765回全国自治宝くじ)発売のさいは、いつも買うなじみの売り場へ朝一番に出かけ、バラのセットを30枚購入した。抽せんの結果は1等の前賞・1億円に当せん。長年の夢がかない、気分上々のKさん。息子にも少し分けてやろうと、ひそかに呼んで、当せんを打ち明けた。

ところがである。たまにしか宝くじ買わない息子のSさんも、同じ売り場で同じようにバラのセットを30枚購入。そうしたら、なんと1枚が1等3億円に当たったっていたのである。Sさんが語るに「私の方が先に新聞で番号調べをして、自分の1等当せんを知ったのですが、あとから番号調べをした親父から、先に1億円当せんを打ち明けられてしましまして…」と困惑顔。とはいえ、父親に自分の1等当せんを打ち明けたら「なにやら、悔しそうな顔をしていました」と語る息子のSさん。

父親のKさんに、当せん金の使途を聞いたら「息子に分けてやろうと思っても、息子の方が3倍も多く当たっていますからね」と少々不満顔で語っていた。それにしても、びっくり、大仰天の強運父子だ。



当せん者エピソード

宝くじ こぼれ話

6億円の当せんを知った瞬間、人に見られぬように、布団をかぶって何度も確認

「宝くじの一番の楽しみは、当せん番号調べをするときのワクワク感ですよ」という人は多い。しかし、番号調べをして、何億円もの当せんを知った瞬間から、言葉に表せないような「不安感」に襲われるそう。以前、こんな当せん者がいた。抽せん日の翌日に新聞で当せん番号調べをしたら1等に当せん。とたんに当せん券のことが心配で外出ができなくなり、支払開始日までの5日間、当せん券を肌身離さずに保管。夏だということにお風呂にも入らず、じっと我慢したそう。

この「不安感」は、現代でも同じようだ。千葉県の子会社員Aさん(51)は昨年のサマージャンボ宝くじ(第754回全国自治宝くじ)を

バラで10枚買った後、別の売り場で連番10枚を購入。抽せん日ののち、夜、寝る前のお楽しみで寝床に新聞を広げ、当せん番号調べを始めた。バラの10枚の結果は末等当せんだけ。続く、連番の番号調べを始めて、1枚目でビックリ!

吹っ飛んだ。手元の「87組149150番」が1等5億円に当せん。続く2枚目は1等の後賞の1億円に当せん。合わせて6億円!

一人暮らしのAさんだが、なぜか、それからすぐに布団の中に潜り込み、枕元にあった小型懐中電灯で、何度も何度も当せん確認。眠れぬまま朝を迎えたそう。

換金の窓口でAさんが語るに「誰かに見られては、まずいと思ったもので…。布団にもぐってしまいました。冷房をかけていましたし、夏掛け布団でしたが、布団の中は暑くて、汗ぐっしょり。大変でした」と語るAさん。高額当せん者には、人に言えない苦労があるようで。

